
眞実 まこと

RALA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実 まこと

【Zマーク】

Z0628D

【作者名】

R A L A

【あらすじ】

16歳・高校2年生の新垣宏乃は、8歳年上のイケメンサラリーマン小山歩と、幼いころから憧れていた日々を暮らしていた。宏乃には忘れられない恋があった。脆く、悲しかったあの恋。過去の恋をちらつかせながら送る日々。最愛の人を想う一心で歩は決断する。

(前書き)

これは、小説家を目指す、R A L Aとしての処女作になります。
どうか、最後まで読んでいただけると嬉しいです。

あのことは数年経つた今でも思い返す度に複雑な想いがよぎる。皮肉にもハッキリ覚えている。

きっとこれからもこの傷は癒えないのだろう、私の罪は消えないのだと。

私には、忘れられない恋があります。

私は、にいがきひるの新垣宏乃。

男っぽい性格で、あまり女の子らしさは無い。

肌も生まれつきこんがりとした茶色だし、背は高いし、太り気味。着やせするタイプだから何とか救われる、今日この頃。

強いて言えば、地図がダメなところとか……、極度の恥ずかしがりなところ(?)とか。

ただ、一途なことが取り柄の私。

「ヒロツ！…」

私は彼の会社の前で待っていた。

制服を着たまま突っ立っていたので、警備員とすれ違う会社員に変な目で見られた。

こんな面倒くさいことは滅多にしないけど、今日は下心があるから特別な日。

「迎えに来てくれるなんて珍しいねっ！俺に早く会いたくなつたの？」

いつも冗談で笑わせてくれる明るい彼、こやまあゆむ小山歩。

彼は24歳の会社員で、私は16歳の高校1年生。なんと年の差8歳のカップルです。

「違うよ～。今日はね、歩の誕生日でしょ？」

「そっかあ……、気遣つてくれたんだねっー優しいなあ……おじさんグッとくるよ！」

「外食しようッ 歩のオゴリー。」

「援助交際じやないんだよ、ヒロ…………。」

渋々だけど、彼は進み始めた。

彼は私と一緒にいるときは、仕事の愚痴をもらしたりしない。ため息も、疲れた顔も一切見せない。私の前では若い自分であり、と思つてゐるかも知れない。

「ねえ……、洋服買つたげるよ。制服じや、援助交際にしか見えないつしょ。」

「えー！マジで？？歩優しい~~~~~！」

見た目が年相応でない彼は、それをひどく気にしている。年の差も、ひどく氣にしている。私がもっと早く生まれていれば良かった、つて最近よく思つ。

結局、歩好みの“お姉系”の服を着せられていた。

私はもともと“ギャル服”が好きだけど、まあ買つてもらつておいてそれは言えない。

それに、今日は彼の誕生日なんだし……遠慮しとくか、なんて。

「綺麗だ。」

彼は夜景の見えるレストランでそう呟いた。

「何が？つづうかドツチが？」

全く、色氣の無い言葉だと思って発言してるけど、彼が“ヒロりしこ”って言つてくれると分かつてたから。

「ヒロらじい言葉だね」

そう、私は大人な恋に憧れていた。

同世代の子の恋愛といえば、手を繋いだり、キスしたりするのにいちいちドキドキしてゐるようなイメージ。

だけど、私の理想はエスコートしてくれる素敵な紳士、いやつやって

夜景の見えるレストラン。

歩と一緒に生活するときの全てが、幸せだとみ締める瞬間。

私と歩は、いつもふたりで食事するときは大体、私の学校の話とか、歩の学生の頃の話をする。

私が学校で告白されたと言つと、内心妬きながらも「モテるんだね」とて言つ。

歩が昔、告白されたときのことを見くと、内心妬きながらも「モテるんだね」とて言つ。

お互い、いわゆるポーカーフェイスで。

「美味しかったね～」

「歩、また連れてきてね～」

「今度はヒロのオゴリでな～」

会計を済ましているとき、ふと歩は口ッチを向いた。

冗談抜きにカラッポな財布を私に見せ付けて、眉をゆがませた。店を出ると、歩はすぐに大きく背伸びした。

「疲れるね～、ああいうお店は。ん～……」

「そつ～。この高貴なワタクシにはお似合いだつたけどね。あなたにはそうじやなくても。」

「ははっ、何それ～。どっちが年上だよ～」

そう言つて歩は立ち止まつた。もう私にはこれから何が起きるのか、分かっていたけど照れ隠しで、いつものポーカーフェイス。

歩はそつと、キスをした。触れるだけの本当に優しいキス。

震えるくらい、ゾツとした。長いキスの後、唇を離したときの切なそうな歩の表情が大好き。

本当に通じ合えてるつて感じる、私の憧れたこの恋。

*

*

*

あんなロマンチックな夜の後なのに、歩は何もしてこなかつた。そのまま家に送り届けて、私を大事に大事にした。16歳には大人すぎる恋だと。

こんなとき、ふと思ひ出す。

さとみけん
里見謙。

私の、すぐすぐ大事な人。そして、僕く終わりを告げた恋を。あんな気持ち悪い別れ方があるだろうか……、確かに彼は言つた。あの言葉がずっと私を悩ませ、苦しめさせている。

私が悪かつたから……、謙には非は無いつて分かつてゐるから余計に辛かつた。

いつまでも愛されてると思つたなよ。

*

*

*

いつの間にか寝ていた。怖い夢を見た、 悪夢。
ひどい寝汗をかいていた。
“歩、助けて！！！助けて！！！”
何度も、そう叫んだ。降りしきる雨の中で、ぼやけていく視界。リアルすぎて、吐きそう……。あの日の光景によく似ていた。

時刻はもう、朝の2時。

怖くて怖くて……誰かに助けてほしかつた。

手に持つていた携帯の画面に映つていたのは、“小山歩”。

プルルル……

ガチャ。

「もしもしつ～？広乃はもつ～……何時だと思つてゐるんだよ～

「……怖いよ、歩つ～……。」

「どうしたの？俺に話して？きつと樂になれるから」

「怖い夢、見たの。もつ、すつ、く怖い夢だよ～！？」

「……俺、そっち行こつか？ひとりで怖いだり？？」

きつと歩はそう言つてくれたと思つてた。歩の優しさに甘えたかつただけなのがもしかれない。

ただ、分かつてゐるんだ。歩はウチには来ないことを。

「平氣だよ～、おやせすみなさい。」

長い、長い一日だった。

*

*

*

次の日は休みの日だった、日曜日。
正直、どうやって過ごしそうか迷つてた。
歩とまたり過ごすのも良し、友達と買物に行くのも良し、ひとりで過ごすの良し。

日曜日に歩の家に行くのは迷惑かな。仕事しているときに行くと、私の前では絶対仕事はしたりしないから中断させてしまふもんね。歩は、会社では“スーパー会社員”。任せられた自分の仕事はバリバリこなしていくし、きっと女性にもモテてるんだろうなあつて。

「もしもしつ？」

（ ）

「もしもしつ？」

（ ）

（ ）

「あ、俺だけどー。元氣してる?」

元氣そうに話す向こう側に、パソコンのキーボードをたたく音がする。

やつぱり、仕事してるんだあ……。

「ウチくる? 暇だしわあ〜〜」はひとつ、

歩が話していたとき、

「あ〜ゅ〜むう〜!..誰に掛けんのー?」

奥から聞こえたので、小ちな声だったけどあれは女性の声だった。いつか会った歩の元カノ、加藤崎さんかとうさき…………。

彼女との思い出は、…………罵られたことしか覚えていない。

初めて会った日は、“歩とは別れてない、あなたは遊ばれるのよ”。

次に会つたときは、“私、デキちゃつたの。あなたつて本当馬鹿な人ね、可哀相。まだ若いのに”。

「おい……、静かにしろって!..」

歩はできるだけ静かに言つたつもりだと黙つけど、ハッキリ聞こえた。

「崎さん、いるんでしょう? いいよ、隠さなくて済む

奇妙な間まができる。

「」めんな……、でも仕事の相談だから……別に怪しことは一切……

ブチツ ツーツー……

電話は、切れた。

*

*

*

それからは、頻繁に友達と遊ぶようになった。男友達もできだし、普通に遊んだ。

嫉妬しているのだと、分かつてゐるけど止められない。

歩から何度も電話があつたけど、出る気はしなかつた。

何度電話を拒んでも、冷たい態度をとつても、歩は迎えに来てくれる信じてるから。

あれから、頻繁に謙のことを思い返すようになつていた。

謙と出会つたのは、大雨の日。

他校だった謙だけど、ここらへんの地区の中学校では有名人だった。

“マジかっこいい人がいる！”

みんな口を揃えてそう言つた。まだ、私が中学2年生・14歳だった頃。

「好きです！！！」

ダメもとで言つてみた私だけど、それは奇跡だつた。

「俺も…………お前が好き」

そのとき交わしたもののが、私のファーストキスだつた。

綺麗な思い出、のはずだつた。

*

*

*

私たちはだんだん、離れられない仲になつていつた。良い意味でも、悪い意味でも。

“倦怠期”というものが訪れた。別れたのは、出会った日と同じ、大雨の日だった。1年前。まだ1年しか経っていない。

別れた原因はお互いにあった。お互いを責めて、お互いの傷を舐め合った。

私は異様にモテる謙に激怒し、謙は付き合い始めた頃とは明らかに違う、私の態度に激怒した。

ふたりをつなぎとめる思い出は、少なかつた。

もつと私が考えていれば、大人だったら良かつたのに。大人になれてたら。

あんなに好きだった謙を失ってしまった。

やがて謙は、すぐに他の誰かと付き合い始めた。

それでも忘れ切れなかつた私は、もう一度やり直そつ、そつ言つた。

いつまでも愛されてると思つなよ。

それは、いつかで聞いた言葉だつた。愕然として、しばらく動けなかつた。

幼い頃に母は病死し、父は酒乱氣味だつた。

私はほとんど毎日のようにに頬を殴られ、腹を蹴られ大変な日々を送つていた。

でも、私はお父さんが大好きだつた、お父さんが死んだ今でも大好き。

ただ、お父さんは私を恨んでた。恨まれてたんだよ、私は……。母さんに迷惑ばかりかけてた私のせいでの、母さんは死んだんだとい聞かされた。

父さんは直腸癌だつた。最後に言つた言葉は

“いつまでも愛されてると思つなよ”。

*

*

*

自分で驚いた、まだこんなに好きだったなんて。
1週間が経ち、私は学校を休みがちになっていた。
週がはじまつたばかりの月曜日、正直、今日は登校しようかどう
か、迷っていた。

ピンポーン

「はい……」

歩は勢いよく私を抱き寄せた。

「会いたかった、ヒロ……」

「何？」

私は冷たく言った。強引に体を離した。

「最近学校に行つてないだろ～？悪い子だな～！オシオキだ～～」

歩はそう言って、無理矢理家の中に入ってきた。

誰も居ない家、殺風景な家。

「へえ～！ヒロはここで生活してるんだあ」

「幻滅した？」

少し笑つてみせた。歩は安心したように続けた。
「崎のこと、気にしてる？」

「うん」

「そんなハッキリ言われると言い難いなあ～。でも、本当に仕事の
話だつたんだからね～～？」

分かつてゐる、本当に仕事の話だつたことくらいは。
ただ……、

歩も謙も両方手に入れたいと願つてゐる、欲深い自分が許せない。

一度手に入れたものは、色褪せてしまつた。

「……気になる人、できたのか？」

心臓が高鳴った。まさに、その通りだつたから。

いつものポーカーフェイスは効果が無かつたみたいだ。

「そつかあ～……。でもそれはじょつがないよね、好きになるのに理由は要らないもんね」

そう言つと、歩は徐に私を押し倒した。

ゆつくつと、そして激しく愛し合つた。歩とは、これが初めてだつた。

でも、お互いが一番分かっていた。
愛の無い行為だったこと。

*

*

*

朝起きると、隣には歩が居なかつた。

“もう、全て終わつたんだ”

「この言葉が何度も胸に突き刺さつていた。どうしようもなく不安で、何度も名前を呼んだ。

“歩、助けて……助けて”。

私は、謙を手に入れられなくて嫉妬してた。そして憧れの恋と称して自分勝手な行為をしていたこと。

歩に申し訳なかつたと思つてゐ、自分の罪を増やしただけでなんの解決にもならなかつた。

机の上には、歩の字で書かれたメモが残してあつた。

『 広乃へ。

短い間だつたけど、俺は最高にヒロを好きだつたよ。お前がもし、ソイツにひどいことを言われたなら、いつでもおいて。俺はずつと待つてるから。いくつ年をとつても、お前を忘れないから。わよつながら、ヒロ。幸せに。

歩

』

こらえていたものが溢れた。

ありがとう、歩……。ヒロもあなたが大好きでした。

あなたが私を大人してくれたんだよ、いつまでも優しかった歩。甘やかした歩。

今、全ての思い出が過去に変わつた。

*

*

*

あれからは、ちゃんと学校にも登校するようになった。

きっと、歩はもう新しい彼女もできたんだろう、あんなにモテてたんだから。

私も頑張らなくちゃいけないね。

こんなにも人に大切に想われた時期があつたこと、一生忘れないよ。

私の罪は消えなくても、たとえ最愛の人に深く傷つけられても。忘れられなくなる。

明日にひづり、希望を持てるんだ。

こんなに、人を愛しいと思つたことはあつただろうか。

こんなに、人を欲しいと願つた夜はあつただろうか。

こんなに、人を憎いと感じた日々はあつただろうか……。

今でも私は必死に生きています。

虚実が絡み合い、溶け合つてゐるからこそ
自分の眞實に近づいていきたい。
自分に素直に生きていきたい。

罪を背負いながら、私は生きるよ

たとえ、あなたを傷つけても。

(後書き)

この小説を読んで、何か感じていただけたら光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0628d/>

真実 まこと

2010年10月9日05時17分発行